

●一過性のブームだったかのように見える論議を、コロナアルの場であり、議論の舞台ともなったメラネシアの立場からとらえ直し、その功罪を歴史的・理論的に検証。

反・ポストコロニアル人類学

——ポストコロニアルを生きるメラネシア

神戸大学 吉岡政徳 著

……日本の人類学界でも、ポストコロニアル人類学は一種の流行であったかのように扱われ、それには触れることなく、実証的なテーマが追求される傾向がここ数年の間に生まれてきている。しかし、日本では、ポストコロニアル人類学の問いかけが、様々な局面で現在も生き続けていることも確かなのである。

発信地では議論が終焉に向かっても周辺部ではそれが継続している、という伝播の法則に則っているかどうかは別にして、日本では、ポストコロニアル人類学の影響はまだ大きいわけだが、それは、議論の進展を生み出していると言うよりある意味で閉塞した状況をつくり出していると言える。「オリエンタリスト」や「本質主義者」というレッテルが烙印の様に入れられ、その結果、自文化中心主義を批判しようとするその姿勢や、文化の差異性を問うような姿勢は、一括して本質主義的として批判され、それ以降の議論が封殺されてしまうという危険な状況を生み出していると言えざるを得ない。本書において、ポストコロニアル人類学を取り上げたことの意味は、こうした人類学的状況から生じている。それが、過去の地平にしまい込まれる前に、それを正面から再度見据え、総括することこそが今必要なことであろう。

本書の舞台は、太平洋のメラネシア地域である。ポストコロニアル人類学の議論の主要な舞台であった太平洋の中でも、特にメラネシアは、コロナアルからポストコロニアルにかけての様々な議論の題材を提供してきたところである。ポストコロニアル人類学の大きな流れの一つである歴史人類学による「歴史をもつれ合い論」や、伝統文化概念を巡る一連の議論すなわち「カストム論」が、メラネシアを主たる対象としていたことからそれが理解できよう。本書では、第一部でメラネシアにおける植民地化、独立をめぐる具体的な事例を対象とした議論を展開し、第二部ではそれを踏まえて、「歴史をもつれ合い論」や「カストム論」をはじめとしたポストコロニアル人類学の理論を批判的に検討する。(序文より)

序

●第1部 コロナアルからポストコロニアルへ

第一章 いびつな異文化接触としての植民地化
サルベージ人類学?/カストムとしての伝統的世界/西洋世界との接触/植民地化

第二章 分離運動

ヴァアアツ独立前後/分離運動の軌跡/独立を巡って

第三章 独立運動と人々のまとまり

ヴァアアツの独立を振り返って/分裂とまとまり/バイカルチュラルな世界/なんとなくまとまる人々

第四章 メラネシアのナシヨナリズム

エトニーとエトノス/ヴァアアツにおけるエトニー/植民地のエリートと「我々」の発見/植民地人民族の自決/エスノナシヨナリズム/独立運動それとも分離運動/ネイション・イズムとエトノス・イズム

●第2部 ポストコロニアル人類学を批判する

第五章 歴史とかわる人類学

構造と歴史/歴史をもつれ合い/客体化/オリエンタリズム/純粹な文化/真正さとリアリズム/歴史記述の基点としての名もなき人々/多配列思考

第六章 カストム論再考

カストム論の系譜/植民地行政と伝統概念/二種の伝統概念/モノカルチュラルとバイカルチュラル/カストムとスクール/異種混濁論批判/操作される伝統概念/真のオリエンタリスト

第七章 本質主義批判を超えて

みそつかす/持続可能な観光と「のぞき見」/秘境ツアー/本質主義者? あるいは人類学者

文献/あとがき/索引

体裁

・四六判・上製・カバー
・三〇〇頁

定価

・二六二五円
(本体三〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一四一九
電話〇三(三八二八)九二四九
http://www.fukyo.co.jp

| | |
|--------------------------------|-------------------|
| 注文書 | |
| 流通センター取扱品 | 発売 |
| 吉岡政徳著 | 風響社 |
| 反・ポストコロニアル人類学 | TEL: 03-3828-9249 |
| ISBN4-89489-104-2 C1039 ¥2500E | 税込み |
| | 二六二五円 |
| | 部 |

(お客様控え)

ご氏名
ご住所
お電話

月 日